様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　６月　７日現在

機関番号：１５２０１
研究種目：基盤研究（ｃ）
研究期間：2008～2012
課題番号：２０５２００５７
研究課題名（和文）　社会学年報学派の宗教研究に関する体系的研究

研究課題名（英文）　A systematic study on the religious studies in the school of l'*Année sociologique*

研究代表者
山崎　亮（YAMAZAKI MAKOTO）
島根大学・法文学部・教授
研究者番号：４０１９１２７５

研究成果の概要（和文）：デュルケームを中心とした社会学年報学派の宗教研究における全体的かつ通時的な方向性を、とりわけモースやユベールの「供犠の本質と機能に関する試論」執筆に関わる共同作業の内実の検討を通じて解明した。また、そのような社会学年報学派の宗教研究の集大成たるデュルケームの『宗教生活の基本形態』を細密に読解し、その翻訳作業を進めた。これに付随して、社会学年報学派の宗教研究、とりわけ『宗教生活』の、日本における受容過程を描き出した。

研究成果の概要（英文）：In this survey, I elucidate a holistic and chronological direction of the study of religions by the school of l'*Année sociologique* through the consideration on the collaboration among Durkheim, Hubert and Mauss in the genesis of "Essai sur la nature et la fonction du sacrifice". Based on this, I examine in detail Durkheim's *Les formes élémentaires de la vie religieuse* that is the most important book of this school's study of religions, and translate it. And in connection with this, I delineate the process of Japan's reception of *Les Formes élémentaires*.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
2009 年度	600,000	180,000	780,000
2010 年度	600,000	180,000	780,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
総　計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・宗教学
キーワード：宗教社会学、宗教人類学、社会学年報学派、デュルケーム、ユベール、モース、赤松智城、古野清人

１．研究開始当初の背景

(1)社会学年報学派の宗教研究：周知のようにエミール・デュルケーム(1858-1917)は、みずから創刊した『社会学年報(l'*Année sociologique*)』(1898-1913)全 12 巻を拠点として当時の新進気鋭の若手研究者を糾合し、社会学年報学派と称される研究者グループを組織した。この学派の活動は後の社会学・人類学の展開に大きな影響を及ぼしたが、なかでもデュルケーム、アンリ・ユベー

ル（1872-1927）、マルセル・モース（1872-1950）、ロベール・エルツ（1881-1915）らによる宗教研究は、学派の研究活動において中核的位置を占めるとともに、供犠、呪術、葬送、口誦儀礼、トーテミズムやマナイズムといった個々のトピックスについてのみならず、聖俗論の視座の確立、宗教の社会的機能の解明、分類体系や象徴に関わる集合表象論等の方法論的議論において、宗教学の領域にも計り知れない影響を与え続けてきた。社会学年報学派によるそのような宗教研究の成果はしばしば連名で発表され、それらが緊密な共同作業の所産であったことは周知の事実である。他方でそれらの成果が、デュルケーム独自の視点から体系化され、『宗教生活の基本形態（*Les forms élémentaires de la vie religieuse*）』（1912）として結実したこともよく知られている。

(2)従来の研究動向：けれどもこのような共同作業の内実、さらには学派による宗教研究の全体像を明らかにしようとする研究は、現在に至るまでほとんど皆無であった。社会学年報学派の研究集団としての構造に関しては、1970年代後半からナンダンやベナールらによって研究が推し進められたが、それらは学派のメンバーの人間関係の形式的な分析に終始し、その宗教研究を支えた共同作業の内実にまでは踏み込んでいない。また、社会学年報学派の個々のメンバーによる宗教研究についても、たとえばイザンベール、フルニエ、パーキン等の近年の研究動向を見るかぎり、学派の宗教研究の全体像を問う研究は現われていない。

(3)新たな体系的研究の必要性：しかしながら、学派のメンバーの個々の業績の真の意義を確定するためにも、またそれらの業績の集大成たる『宗教生活の基本形態』の意義を読み解くためにも、それらを産み出した共同作業の内実、さらには学派による宗教研究の全体像を明らかにすることは、必要不可欠の作業といえる。そのため申請者は、『社会学年報』全12巻の宗教社会学セクションの項目の変遷を詳細に検討し、ユベールとモース、デュルケームによる関連文献を渉猟しつつ、学派に共有される宗教研究の枠組――宗教的表象＝信念、宗教的実践＝儀礼、社会組織、ならびにそれらを包摂する全体的な宗教体系の概念という、4つのカテゴリー――が、1904年頃から定着していく過程を解明した（山崎　亮「社会学年報学派の宗教学思想・序説――『社会学年報』宗教社会学セクションの構成を中心に」『島根大学教育学部紀要』40、2006年）。この新たな知見を基に、社会学年報学派による宗教研究の精査を通じてその具体的全体像の提示をめざすために、デュルケーム、モース、ユベール相互の交流の詳細を明らかにするとともに、宗教関連のそれぞれの論考の生成過程にまで踏み込んだ分析を展開する必要が生じたのであった。

(4)モース文庫に含まれる一次資料の重要性：このような一連の作業を遂行する上では、コレージュ・ド・フランスで長年教鞭を執ったモースに関連する多様な文書を保管するモース文庫（Fond Mauss：以前はコレージュ・ド・フランス内に保管されていたが、2001年以降、ノルマンディー地方のCaen市近郊に所在するIMEC［l'Institut Mémoires de l'édition contemporaine］で管理され、閲覧に供されている）の存在が大きな意味を担うことになる。このモース文庫には、モースとユベールの共同執筆になる論文草稿、モースによる書評や講義の原稿、モースの学生時代の講義ノート、デュルケームやユベール、エルツからの書簡、さらには当時の代表的な人類学者・宗教学者からモースに宛てた数多くの書簡等が含まれている。デュルケー

ムやユベールからの書簡の一部はすでに公刊されているが、それはモース文庫に保管されている資料のごく一部にとどまり、多量の貴重な一次資料が未公刊のまま残されている。それらは従来、社会学年報学派の宗教研究の検討にはほとんど利用されてこなかった。本研究では、このモース文庫の一次資料を活用して、社会学年報学派による宗教研究の体系的な解明を試みたのであった。

２．研究の目的

本研究は、平成２０年度から２４年度までの５年間で、フランス社会学年報学派による宗教研究のあり方を体系的に解明し、宗教学の視点からその意義を再検討することを目的とした。その際、1)学派の主要メンバーであったデュルケーム、ユベール、モースによる宗教研究を、共通の枠組に基づく共同作業の所産ととらえ、とくにモース文庫に保管されている一次資料を中心とした関連文献の精査を通じて、彼らの共同作業の内実を解明し、2)当時の社会的・思想的コンテクストのなかにこれを位置づけ、3)宗教学説史におけるその意義を再考する、という三本の柱を立てた。とりわけ 3)については研究の途上で、『宗教生活の基本形態』に、学派のそれまでの宗教研究がどのような形で反映しているのかの検討、また『宗教生活』を中心とした社会学年報学派による宗教研究の、日本における受容過程の検討という二点に焦点を絞ることととした。

３．研究の方法

研究方法としては文献解読・分析が基本となる。とくにその具体的な作業の中心は、年1回 IMEC に赴いてのモース文庫の資料調査――IMEC では手書きの書簡・草稿類の複写・写真撮影は認められていない――と分析になるが、さらにその成果もふまえて、社会学年報学派による宗教研究の公刊されたオリジナル・テクスト――とりわけ「供犠の本質と機能に関する試論(Essai sur la nature et la function du sacrifice)」と『宗教生活』――、ならびにこれに関連する二次文献の検討を行なった。

４．研究成果

デュルケームのボルドー大学在任時代、『社会学年報』第 2 巻(1899)に発表されたユベールとモースの処女論文、「供犠の本質と機能に関する試論」の生成過程に関しては、数種類の論文草稿、ユベールの書簡、デュルケームの書簡等の分析に基づき、デュルケーム、ユベール、モース三者による「隠された共同作業」の内実を、かなり詳細に解明することができた。当初、デュルケームの発生論的視点――すべての社会制度を説明するにはその起源を探らねばならず、その際には「原始的事実」としての宗教現象の研究が重要となるとする――から開始された共同研究は、やがて三者の共同作業のなかで、共時的かつ構造論的視点を芽生えさせていく。それは、以後の学派に共通する宗教研究の基本的方向性となるのだが、さらにデュルケームに対しては、儀礼が社会活性化の機能を果たすという、新たな発想をもたらすことになる。要するに、「供犠論」の「困難で混沌とした生成」（ベナールによる表現）は、ユベールとモースによる宗教研究の出発点であると同時に、デュルケームの宗教研究の転回点でもあった。この間の事情は、とりわけ「供犠論」の結論部分に暗黙のうちに示されている（雑誌論文⑥、学会発表④）。

上記の研究成果をまとめ、本研究の出発点となったデュルケームの宗教学思想の全体像とも関連させて、いわば中間報告として発表したのが、学会発表③である。

他方で社会学年報学派の宗教研究の全体的な枠組みを踏まえながら『宗教生活』の細密な読解に取り組むなかで、古野清人(1899-1979)の1930年代の邦訳以来、ほぼ80年ぶりの新訳の作業を進めることができた。その成果は、2013年度中に出版できる見通しである。

これに伴い、日本における『宗教生活』の受容を確認する作業が不可欠となった。それは同時に、社会学年報学派の宗教研究による影響の一端を、日本をフィールドにして確認する作業ともなる。この結果、とりわけ戦前を中心に、赤松智城(1886-1960)――彼が1914年に発表した「認識論と宗教社会学説」［『密宗学報』17, 18］は、『宗教生活』の序論の抄訳であり、管見の及ぶかぎり、デュルケームの著作の最初の邦訳である――と古野清人による『宗教生活』の解釈と紹介の過程を明らかにした上で、従来の日本におけるその受容の限界を浮き彫りにすることができた（雑誌論文①。ちなみにこれは、*Religion*誌による『宗教生活』刊行100周年の記念号への依頼原稿である）。この作業には、モース文庫での調査結果も反映されている。これに附随して、学会発表①では、『宗教生活』受容の背景となる近代日本における宗教概念の布置状況の一端に関しても報告している。

また、19世紀末から20世紀初頭の社会学年報学派による研究活動の、思想的・社会的背景に関しても研究を進めたが、その成果の一部は雑誌論文③（書評）、図書②（事典項目）として発表している。

さらに本研究は、社会学年報学派の宗教研究の全体像の解明という直接的な目的のみならず、私が現実の宗教現象を研究していく上での、理論的・思想的基盤の確立にも向けられていた。その意味では、山陰地方の宗教民俗を直接実証的に扱った雑誌論文②④⑤ならびに学会発表②⑤も、本研究の間接的所産の一端と位置づけることができる。

以上の研究成果を集約して、前記論文「社会学年報学派の宗教学思想・序説」ならびに下記雑誌論文①⑥に、大幅な修正を加えたものを本論とし、これに補論として雑誌論文③、さらに附録として、わが国ではアクセスが困難なFonds Maussの目録抄ならびに日本と関連のある若干のモース宛書簡、さらに国内のみならず海外でも稀覯本である初期の*Études durkheimiennes*（1977-94）――社会学年報学派に関わる研究についての年刊の情報誌。’75から’84まではフランスのフィリップ・ベナール、’89から’94まではアメリカのロバート・アラン・ジョーンズがそれぞれ中心となって編集されていた――の目次総覧、また「山口大学附属図書館所蔵赤松文庫について」――これらはいずれも本補助金による調査活動の成果の一部である――を収めた紙媒体のインフォーマルな報告書（山崎　亮、2008～2012年度科学研究費補助金（基盤研究(c)）（一般）研究成果報告書「社会学年報学派の宗教研究に関する体系的研究」、2013、88p.＋4p.）を作成した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計10件）

① Makoto YAMAZAKI, Japan's recep- tion of *Les formes élémentaires de la vie religieuse*, in *Religion* 42-1, 2012, pp.53-62、査読有
② 山崎　亮、木ノ下金屋子神社の成立と「金屋子神略記」、田部家のたたら研究と文書目録――田部家文書調査報告書（上）、2012、pp.136-156、査読無
③ 山崎　亮、書評と紹介：伊達聖伸著『ライシテ、道徳、宗教学――もうひとつの19世紀フランス宗教史』、宗教研究85-3、2011、pp.178-183、査読無
④ 山崎　亮、「金屋子信仰」再考――研究史の再検討と石見地方の金屋子神祭祀、山

陰におけるたたら製鉄の比較研究、2011、pp.25-38、査読無

⑤ 山崎　亮、石見地方における「森神」をめぐって――明治初年「神社書上帳」を手がかりに、山陰民俗研究 15、2010、pp.39- 59、2010、査読無

⑥ 山崎　亮、ユベール・モース「供犠の本質と機能に関する試論」の生成――社会学年報学派の宗教学思想Ⅰ、社会文化論集:島根大学法文学部社会文化学科紀要、5 、 2009 、 pp.63-84 、 査 読 無 (http://www.lib.shimane-u.ac.jp/0/collection/repo/)

〔学会発表〕(計 6 件)

① 山崎　亮、井上寛司著『「神道」の虚像と実像』を読む――宗教学の視点から、第 33 回歴史社会研究会、2012.11.7、島根大学法文学部(松江)

② 山崎　亮、「金屋子信仰」再考、「山陰の製鉄業」古代文化センター客員研究員検討会、2010.12.23、古代文化センター(松江)

③ 山崎　亮、社会学年報学派の宗教学思想、社会文化学科研究交流会、2010.3.16、島根大学法文学部（松江）

④ 山崎　亮、デュルケームとモースの「隠された共同作業」――「供犠論」の生成、日本宗教学会第 68 回学術大会、2009.9.12、京都大学（京都）

⑤ 山崎　亮、石見地方の森神信仰、山陰民俗学会平成 21 年度年会、2009.8.2、松江テルサ（松江）

〔図書〕(計 2 件)

① 池上良正・島薗進・山崎亮他、丸善、『宗教学事典』(執筆項目＝原始心性、トーテミズム)、2010、659p（44-45,278-279）

６．研究組織

(1)研究代表者

山崎　亮（YAMAZAKI MAKOTO）

島根大学・法文学部・教授

研究者番号：４０１９１２７５

(2)研究分担者　なし

(3)連携研究者　なし